

広報レポーターが気づいたまちの魅力

住みよさ  
実感

## 民話の舞台を訪ねて～光堂の竜～ ひかりどう

光堂は小倉(永治地区)にある国の重要文化財「宝珠院観音堂」の通称です。皆さんはこの光堂にまつわる「光堂の竜」という民話をご存じですか。物語によれば光堂には江戸初期の彫刻師「左甚五郎」作の竜の尻尾があり、毎年稲穂が色づく秋になると、日光から光堂まで竜が自分の尻尾に会いに来る。その証拠に竜が通ったように近くの田の稲穂はぐねぐねとなぎ倒されるのだとか。

森の中にひっそりと佇む光堂



秋晴れの日、物語に誘われ、その舞台となった光堂に行ってみました。泉倉寺(和泉)<sup>せんそうじ</sup>の近く、車も入れない細い道を歩いて行くと、スギとイチョウの大木に囲まれたお堂が現れました。外観は茅葺屋根の簡素な建物ですが、内の柱の一部や厨子は色鮮やかな装飾が施されているとのこと。残念ながら扉が閉まっていて中を見ることはできませんでした。しかし、辺り一帯は静寂に包まれ、1人佇んでいると、民話の世界にワープし、竜に会えそうな気持ちになりました。

結縁寺の「頼政塚<sup>よりまさづか</sup>とじごくそば」、師戸の「お鶴とこま犬」、草深の「草深原の狐<sup>そうふけつばら</sup>」など印西には他にも民話が残っています。読書と行楽の秋、印西の民話集を読み、その舞台を訪ねる遠足はいかがでしょう。



広報レポーター

塩田 幸子 (浦部)



印西に伝わる8つの民話が載っています

竜が通ったと伝わる光堂近くの秋の田園

